Ⅳ　本年度前半の記録

Records in the first half of this year

※この章の英語版は

別冊となっています。

The Engilsh version of this chapter is separately bound.

１．一年生
　オリエンテーション　講演会・特別授業
　フィールドワーク　STEP ゼミ　GE
２．二年生
　STEP ゼミ　シナリオプランニング　GE
３．三年生
　卒業論文

１．一年生

１年　①オリエンテーション（G-Mission）

【意義・ねらい】

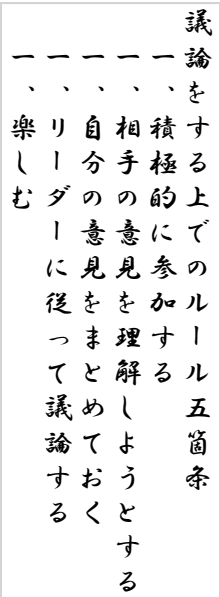
・総合的な学習の時間の雰囲気を体感する。
・グローバルコース生としての自覚を持たせる。
・パソコンの使用や著作権など、今後活動する上で注意すべき事を覚える。
・明確な正答が存在しない問いに取り組む姿勢を身につける。

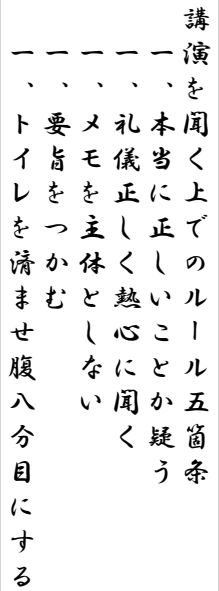
『議論をする上での五箇条』『講演を聴く上での五箇条』を考えて発表し、投票の後一つに絞るという作業を行った。ブレインストーミングの手法で発散と収束を行いながら班の意見として一つにまとめるという作業を行った。

【授業の流れ】

１回目	情報収集の方法やＰＣを利用していく上での注意 総合的な学習の時間の進め方について
２回目	一枚の写真を見てその写真の分析を班員で議論し、二百字の文章に仕上げる
３回目	各班でまとめた案の一覧を見て重複する項目を整理する
４回目	各班で議論・講演の五箇条をまとめていく
５回目	各班による五箇条のプレゼンテーションと投票・オリエンテーションの総括

【生徒作品・成果物】





・この写真は全体的に暗く、階段の奥に１人の男性がいてその男性の後ろ姿からは、寂しさを感じ取れる。階段の下にある赤い風船から連想される楽しさや無邪気さなどの明るいイメージとこの写真全体から感じられる暗いイメージは正反対で、階段の上下に男性と風船があることから階段の下が過去、上が未来と考えると楽しかった少年が大人になるにつれて数多くの不安を抱えながら生きているのだということが考えられる。

グローバルコース３期生オリエンテーション mission　No.1

問　キングクロス駅の写真です。この写真の解説を 200 字以内で書きなさい。（句読点１マス扱いとする）なおこの問は、生徒間での相談や他の情報源を利用することを禁止とします。
提出は４月１８日（火）総合授業時。

・この写真は風船と、場所と、人物に注意してみてもらいたい。場所は題名の通りキングクロス駅。即ち「駅」なのだ。駅には普通人がたくさんいるというイメージだ。しかしこの写真には、一人の男性しか写っていない。また、この駅は非常に暗い。天井に一つ明かりがあるだけだ。この暗さからは少なくとも希望は感じられない。よって、これはキングクロス駅周辺の通り人口の過疎化を意味する。手すりに付けられている風船は子供が少ないため、子供の手に渡ることなく、寂しげにくくりつけられている。この風船の色にも意味がある。というのもさっき説明した通りこの写真からは希望が感じられないのは風船の色が明るい色でないこともあるからだ。この風船の色は暗い赤だ。

【生徒の感想】

・はじめに意見を交換した時一人一人全く違うことに驚きました。他人の考えを聞いてなるほどと思うものもあったので他人の意見を聞くのは大切なことだと思います。自分の考えも広げるために今後も様々な人たちの意見をしっかり聞いていきたいです。切り口を想像し、考え、そこから想像を広げていくというのは予想以上に難しかったです。しかしグローバルコースということを軸にキングクロス駅の問題を考えると、最初に問題を見た時よりもスラスラと考えが浮かんだように思います。今回の問題を通して一つの問題どこを切り口にして考えるかということはとても大切だと感じました。これからグローバルコースで様々な問題に取り組み、グローバルリーダーを目指して頑張りたいと思います。

・各班のプレゼンテーションを聞きました。内容も同じものもあれば、少し違うものもあり、人によって考えが異なることを改めて実感しました。発表の仕方も班ごとに異なっていたので（具体例を入れたり、劇をしたりなど）今後のプレゼンテーションの参考になりました。これらのことをふまえ、次のプレゼンテーションでは、もっと興味を持ってもらえるものを作りたいです。

【講評】

漠然とものごとを眺めるのではなく、恣意的に視座を定めれば新たな発見や気付きに繋がることを生徒達は体感できた。また、様々な意見を集約していくという作業の中で、意見をまとめる難しさや、発展的な議論を導く難しさを体験できた。その点では当初の狙いは果たせたと言える。ただ、一部のグループは時間内での作業終了を主眼としていたので内容の充実度を重視するよう働きかける必要を感じた。

１年　②講演会・特別授業

１、グローバル人材のための思考技法

講師：立命館大学大学院　テクノロジー・マネジメント研究科　湊　宣明　准教授
日時：平成２９年５月２日（火）　１１：４５～１２：３５
内容：①発散と収束という思考技法について
②ブレイクスルーが起きるような発明はメンバーの多様性から起こるという調査結果をもとに、多様な成員での議論が大切であることを学ぶ。
③上記２点を受けて、具体的にグループでブレインストーミングを行ってみる。

２．　Political

講師：関西学院大学　国際学部　吉村　祥子　教授
日時：平成２９年６月２日（金）１５：２０～１６：１０
内容：①「世界がもし 100 人の村だったら」を題材に、国際的な観点をもって物事を俯瞰することの重要性を学ぶ。
②「貧困」というものを中心に、教育や環境などの、諸問題における格差是正のための取り組みについて学ぶ。
③実際に「役割カード」を用いてワークショップを行い、様々な境遇に置かれた人たちの比率を可視化することで①、②の内容をさらに深めることを目標とする。

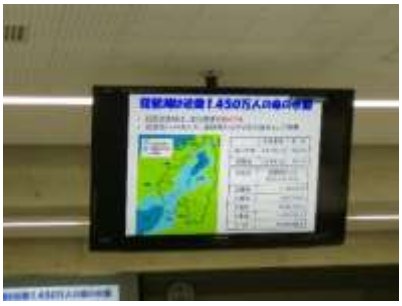
３．　Economics

講師：関西学院大学　イノベーション研究センター　土井　教之　教授
日時：平成２９年９月５日（火）１１：４５～１２：３５
内容：「グローバル経済下の企業と産業～エネルギー経済から～」
①日常の疑問を経済学で考えよう
②エネルギー経済のしくみ～産業内と産業間～
③エネルギー経済と経済学～経済学の基本的な考え方～
④企業・産業の経済分析の方法について

４．　Societal

講師：関西学院大学　社会学部　村田　泰子　准教授
日時：平成２９年６月３０日（金）１５：２０～１６：１０
内容：①社会学という学問領域について
②ケアと社会―児童虐待の低減をめざす文理融合プロジェクトの経験から―

５．　Technological 授業
講師：滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課　田仲　輝子　先生
日時：平成２９年６月１３日（火）１１：４５～１２：３５
内容：①琵琶湖の価値について
②琵琶湖における課題と取組の経過
③琵琶湖における取組について



１年　③フィールドワーク

１．Societal

講　師：関西学院大学　社会学部　　村田　泰子　准教授

日　時：平成２９年７月２４日（月）１５：００～１７：００

場　所：関西学院大学　西宮上ヶ原キャンパス

参加者：高校１年　グローバルコース生（１１名）

テーマ：「ジェンダーの観点から見た中国と日本の違いについて」

内　容：①村田先生から日本の子育てについての現状や家族関係の変化についての講義

②上記①を基に、２班に分かれ中国人留学生に中国での子育てや家族についてインタビュー

③インタビューを各班で日本との違いやそれぞれの意見をまとめ、その内容を報告・共有する

２．Political

講　師：関西学院大学　国際学部　　吉村　祥子　教授

日　時：平成２９年７月１１日（火）１３：３０～１６：３０

場　所：関西学院大学　西宮上ヶ原キャンパス

参加者：高校１年　グローバルコース生（１１名）

テーマ：「国際問題について」

内　容：①関西学院大学の吉村先生のゼミ生７名による論文のアウトラインの発表

・国際法や国際政治、紛争などについての発表を聞く。

・質疑応答をしながら理解を深める。

②４つの班に分かれてグループディスカッション

・論文の内容の理解をさらに掘り下げる。

・大学生活について。

３.Technological
講　師：産業技術総合研究所関西センター　**無機機能材料研究部門　堀内 哲也　研究員**
日　時：平成２９年７月１８日（火）１４：００～１６：３０
場　所：産業技術総合研究所関西センター
参加者：高校１年　グローバルコース生（１６名）
テーマ：「アイデアとコンセプト」
内　容：①「旅行先を１つ設定し、１ヵ月間遊ぶことができる遊具を考える」ということにテーマに商品を発案する。（ブレインストーミング）
②電子顕微鏡などの研究所・設備を見学し、日本の最先端の研究・技術に触れる。

４.Technological
講　師：滋賀県庁水産課主査　　亀甲　武志　さん
日　時：平成２９年７月３１日（月）８：３０～１７：００
場　所：滋賀県高島市周辺
参加者：高校１年　グローバルコース生（２０名）
テーマ：琵琶湖に見られる環境問題とその現状を知り，課題への取組方を考える。
内　容：①三和漁港での見学と講義
②針江地区のカバタ見学
③ヨシ帯の観察

１年 ④STEP ゼミ

前期は Political（政治学的分野）と Economic（経済学的分野）を中心に取り組みました。

1) Political（政治学的分野）

【意義・ねらい】

- 他国の文化に関する関心を高め、異文化を持つ者同士でより良い関係を築くために必要なことを考える。
- 調査、発表などに必要な技能を高める。
- グループ活動を通して、課題解決力や問題解決能力を養う。
- 自班の主義主張を押し出して意見を通すという、いわゆる「ディベート」ではなく、他班との歩み寄りを考える「協調性」の精神を養う。

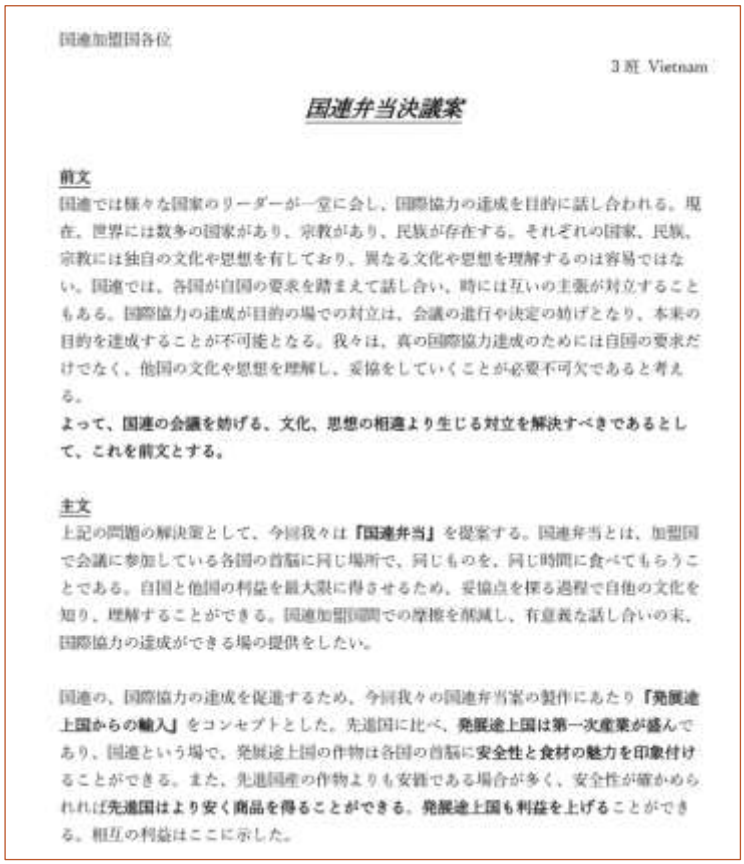
国際政治に関する理解を深める取り組みとして、最終的に「模擬国連」参加に向けての練習課題に取り組む。そのための演習課題として、Political の授業では「国連弁当」を題材にしている。これは、国連会議の合間に同じ弁当を食べるとするとどのような弁当が適当か考える課題である。「弁当の中身を考える」という身近なテーマで生徒に取り組みやすさを与える一方、メニューを考えるには世界各国の食文化、経済状況、国の産業、宗教など様々なことを考える必要があり、総合的な知識や情報収集力が問われている。今年度はマレーシア・メキシコ・ドイツ・サウジアラビア・ナイジェリア・ベトナム・ブラジルの７国が中心となって会議を行っているという想定で課題に取り組んだ。

【授業の流れと生徒の感想】

回	内容	生徒の感想等
1 回目	ガイダンス	しっかりと自分に任せられた仕事をして、チームに協力できるようにし、円滑にグループの議論を進めていくことです。
2 回目	Position Paper（国の基礎情報）作成	Political で発表する時に中途半端な知識で臨むのではなく、学校１詳しいと言えるほど調べて、情報の“抜け”がないように徹底したいです。 その時により効果的な情報を用いた資料を作ってプレゼンしたいと思います。
3 回目	Position Paper グループ発表	改めて人の前で喋る難しさを知った。時間が迫っていたがアドリブが利かずそのまま原稿を読んでしまって班の方に迷惑がかかってしまった。 質問された時に、ちょうどその内容を調べていたのにうまく言葉にできなくて説得力ある説明ができず、一言しか返せなかったのが悔しい。たくさんのことを頭に入れて発表に臨まなければならないことが分かった。
4 回目	前回の振り返り 政策立案（１）	話しているときの口調が聞き取りにくかったり、図を上手く使えていないという指摘を得ることができ、課題がまだまだあることに気付かされました。
5 回目	政策立案（２）	各国の宗教的な事を考えるとなかなか思った料理を使えないので大変でした。
6 回目	決議案のグループ発表	多くの宗教がある中、どの国でも肉類が問題点となっていた。その解決策として、フェイクミートを代わりに使ったり、ベジタリアン用のメニューを作ったり、選択式にするなどして解決を図っていた。 プレゼンテーションでは、各班、説明の途中で出てきたものの具体的な写真がないなどの問題点があった。
7 回目	決議案の修正	他国への配慮が少なかったと実感しました。輸入先を工夫することで他国への利益を考慮していこうと思います
8 回目	決議案提出・まとめ	今回のゼミでは、発表や様々な作業や思考を行い、これから先の活動で役に立つ経験も多くできた。

【生徒作品・成果物】

・生徒の決議案の一例



国連加盟国各位

3班 Vietnam

国連弁当決議案

前文

国連では様々な国家のリーダーが一堂に会し、国際協力の達成を目的に話し合われる。現在、世界には数多の国家があり、宗教があり、民族が存在する。それぞれの国家、民族、宗教には独自の文化や思想を有しており、異なる文化や思想を理解するのは容易ではない。国連では、各国が自国の要求を踏まえて話し合い、時には互いの主張が対立することもある。国際協力の達成が目的の場での対立は、会議の進行や決定の妨げとなり、本来の目的を達成することが不可能となる。我々は、真の国際協力達成のためには自国の要求だけでなく、他国の文化や思想を理解し、妥協をしていくことが必要不可欠であると考える。

よって、国連の会議を妨げる、文化、思想の相違より生じる対立を解決すべきであるとして、これを前文とする。

主文

上記の問題の解決策として、今回我々は**『国連弁当』**を提案する。国連弁当とは、加盟国で会議に参加している各国の首脳に同じ場所で、同じものを、同じ時間に食べてもらうことである。自国と他国の利益を最大限に得させるため、妥協点を探る過程で自他の文化を知り、理解することができる。国連加盟国間での摩擦を削減し、有意義な話し合いの末、国際協力の達成ができる場の提供をしたい。

国連の、国際協力の達成を促進するため、今回我々の国連弁当案の製作にあたり**『発展途上国からの輸入』**をコンセプトとした。先進国に比べ、**発展途上国は第一次産業が盛ん**であり、国連という場で、発展途上国の作物は各国の首脳に**安全性と食材の魅力を印象付け**ることができる。また、先進国産の作物よりも安価である場合が多く、安全性が確かめられれば**先進国はより安く商品を得ることができる。発展途上国も利益を上げる**ことができる。相互の利益はここに示した。

【Political 全体を通しての生徒の感想（一部抜粋）】

・pp（第一回目の発表）の発表では原稿を読んでいたという指摘があったので、中間報告では改善するように心がけました。

・授業全体を通して、自文化だけでなく他文化への気遣い、つまり妥協案を探すのに必要な考え方を学ぶことができた。自分たちの意見を主張するためには下調べが必要不可欠だということも知った。

・国連弁当の企画をしたことで、世界の関わる現場では考慮することがとても多いなと感じました。そして決定するには絶対に妥協点が必要なことも知りました。

【講評】

・「国連弁当」というものを考える上で、各国の習慣や宗教の観点から、全世界の人々が納得して食べられるものというのは限りなくゼロに近い。だからこそ、自分の主張を突き通すだけでは、円滑に話し合いが進まないということを、身をもって学んでくれたと思う。

・本来ならば、各国との利害を調整するための「交渉」という作業を重点的に学んでほしいと考えていたが、授業数の関係や班の数の関係で、時間をあまり割くことができなかった。前年度とほぼ同様に、基本的に決議案の作成までを授業内で扱い、交渉の部分は、ほとんど各グループの授業外課題としてならざるを得なかった。

・生徒たちには、この Political の授業をきっかけに「模擬国連」というものを身近に感じてほしいと思う。そして、来年度には本格的に「全日本高校模擬国連大会」などの全国的な大会に出場できるように努力を続けてほしい。今年度以上に、国際的な視野をもってほしいと願ってやまない。

2)Economic（経済学的分野）

【意義・ねらい】

・社会的な課題の解決に取り組む企業について企業活動や技術の動向を知る。

・ヴァーチャル投資を行って経済・市場の動向を知る。

生徒は経済の仕組みや企業活動についての知識が少ない。様々な社会的な課題について取り組んでいる企業が多いにもかかわらず、その活動は高校生には見えていない。次年度に SP を行うにあたって、企業活動や技術革新の分析を通して、経済や企業の基礎知識を身につけさせ、さまざまな地球的・地域的課題を解決するための発展的な議論が出来る素地を育成することを目標とした。

授業は情報を与えるのではなく、自ら情報を求めさせる方法として、日経ストックリーグ(ヴァーチャル投資)の手法を活用することにした。企業への投資行動によって、企業がどのような活動を行っているか、どのような技術をもっているか、どのような社会的貢献を行っているかといったミクロな視点を養うことが期待できる。また、希望者を対象に日経未来投資プログラムに参加し、ヴァーチャル投資を一般の人々と競い合った。これらを通して、株価の変動は内外の経済、政治など様々な影響をうけ、マクロな視点を養うことができる。

【授業の流れ】

1･2 回目	5 月	テーマ設定
3 回目	6 月上旬	テーマに関する企業を調べよう
4 回目	8 月下旬	スクリーニングについて 指標を考える
5 回目	9 月上旬	スクリーニング作業
6 回目	9 月下旬	発表の準備
7 回目	10 月中旬	発表
8 回目	10 月下旬	レポートの完成　総括

【生徒作品・成果物】

【生徒の感想】

<1 回>

・今回の economic ではブレインストーミングを楽しんでできました。人の意見を見たり聞いたりすることで、こんなことがあったなと思い出すことも何度かありました。今後 未来投資プログラのやつもやっていきたいです。

・関心のあることについて意見を出し合い、ブレインストーミングを使って議論し、表？を作成した。1 人で考えるよりも多人数で、無言よりも声を出して取り組む方がやはり効率が良かった。E の授業では株式について学んでいくみたいなので、何が大切か見極める能力が必要となってくると思う。早くもっと株について学びたいと思った。

<2 回>

・今日は、自分ではわかっているようでも全然わかってないんだということを強く感じました。次の時までにできるだけ調べておきたいと思います。

・今回は最後まで問題点や課題を考える作業でした。課題から問題点がなかなか出てこなくて苦戦しました。ニュースの内容の何が問題なのかがわからないのでそれらの問題点もわかりませんでした。アメリカは壁を作ろうとしているのは知っているけど、それがなぜかをわかっていないなど。ニュースもチラッと見ているだけで内容をあまり考えていないんだなと実感しました。これからはニュースだけでなく新聞などで幅広く知識を広げていきたいです。

<３回>

・今日はテーマ決めとそれに関連する会社を調べた。投資テーマはすぐに決まったものの自分達が普段調べないような物事にそって調べることに難しさを感じた。もっとテーマの中でもさらに絞って会社を決めていきたい。

<４回>

・テーマに沿った企業を調べました。防災の中でも防災グッズや耐震、復興などいろいろあるので探すのは大変でした。用語などもまだ調べられていないので次回までに調べておきたいと思います。会社が自分が思っていたよりも多くいろいろなことをしていたので見逃さないようにはばひろくしらべていきたいです。

<５回>

・思った通り調べた会社の個数が少なく、まず指標を考える前にもう少し会社を増やそうということになった。やはり考えた会社や言葉で調べてみた会社が上場してないことが多く行き詰まっていたが、先生から最初のテーマを決めた時に関連のあるものにどんなことがあったか、食に関して作る、食べるだけでなく、他にどのようなことが連想されるかと言うことを考えてみるのが良いと聞いた。まだ会社数が少ないので先生のアドバイスを元に増やしていきたい。

<６回>

・前回に決めて調べてきたもので、事業数と CSR の基準が怪しかったので指標をもう一度考えた。事業数と利益、従業員数は日本経済新聞からとることにした。財政は利益で点数を分けた。CSR は宇宙関連のものか、人材育成のものか、その他で点数を分けた。あとは事業数と、労働生産性、売上高研究開発費率にした。

<７回>

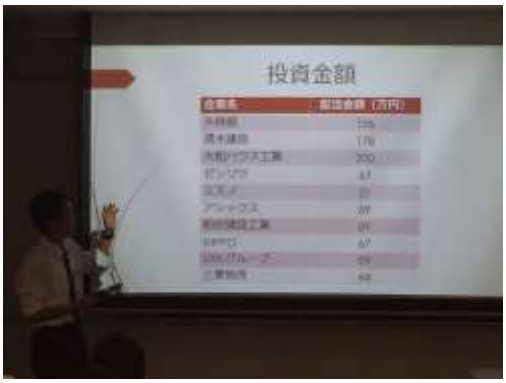
・今まで学んだことを総まとめし、発表をした。少し緊張してしまったり時間がなく早口になってしまった。またパワーポイントをもっとしっかり作っておくべきだった。反省点がまだまだ多かった発表であったがこの失敗を次に繋げていきたい。

<８回>

・今までの活動を通して投資の難しさを学んだ。今まで投資は適当に企業を決めて投資していると考えていたが自分でしてみると投資しようと思う企業の安定性、安心性などなどいろいろなことを考えなければならないことが分かった。これからこの経験を生かしていきたい

【講評】

テーマ決めではブレインストーミングの授業のあと、すぐに活用できたくさん意見がでたようだった。しかし、思った以上に知識がなく、ニュースの何が問題なのかが分からなかったりと最終的なテーマ決めに時間がかかった。他の授業の課題などが間に入り、集中して取り組むことが出来なかったようで、全体的に進度が遅れていった。テーマの設定方法を検討したほうがいいと感じた。



3)Societal（社会学的分野）

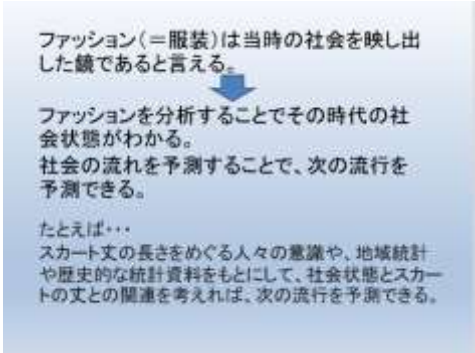
【意義・ねらい】

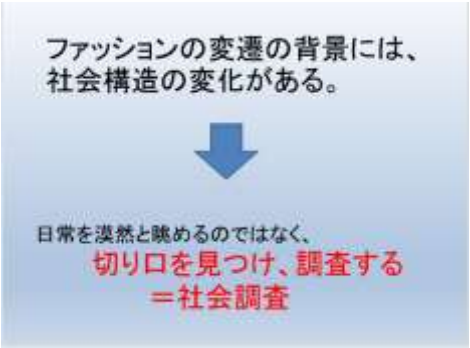
・表計算ソフトによる統計処理を実施する
・論理的思考力を養う
・社会調査を行う
・データから人を納得させる立論をする

【授業の流れ】

1 回目	各学問領域の説明と社会学についての説明
2 回目	アンケート実施についての説明と班活動によるテーマ設定
3 回目	テーマとアンケートのアウトラインを決定し、概要の PW を準備する
4 回目	PW による中間報告会を実施し、他の班からの意見をもらいアンケートの完成
5 回目	アンケートの結果分析と推論の立案
6 回目	発表の準備
7 回目	発表
8 回目	反省点と統計というものについての総括

【授業時の様子、及び PW 一例】





【生徒の感想】

・社会学とは、人と社会を関連させるものを探求していく学問。
社会の流れを知ることで、未来予測の手がかりとなる。

・具体的に、近年のファッションの変遷から、社会状況の変遷を考察した。情勢の反映としてファッションなどの表面上に現れるものを多角的に分析していくことがこの授業の本旨だと思った。

・"Societal とはどのようなものかを学び、年代ごとの服装の流行（日本とアメリカ）のビデオを見た。
普段何気ない日常もデータ化して比べてみればとても面白そうだと思いました。
四分野どれを選ぶかとても迷ってきました。"

・今回は、第一回の Societal（社会学）のオリエンテーションが行われた。社会学とは、個人と社会の繋がりを調査する学問であり、その手がかりとなるものは、我々の日常生活のあらゆるところに存在している。故に、当たり前のことを調べ上げることが、個人と社会の繋がりを知るうえで大切なことである。

・今回は、ファッション を例としてそのシミュレーションを行った。自分たちの身近に社会を知る手がかりがあるということがよく理解できた。

・"STEP ゼミの考え方のまとめと、社会学の説明、最後には実際に社会学を考察した。
また、社会学が大きく世の中の情勢に関わっているということを学んだ。
例えばファッションの移り変わりでは、その時代の人がどんな素材を求めるかのニーズ、流行を追いかけようとする人の心理などが移り変わっていった原因と考えられるのだが、これからの S の授業でどんなことを押さえれば、人々の思いを正確に捉えられるかを学んでいきたいと思う。"

・社会学の基本的なところを教わった。日常の裏にあるもの（政治など）に目を向けようとするのが大切だ。今回はファッションに関する映像を見て、年代によって変わったところを探し、そのときに何があったかを考えた。当たり前のことを当たり前じゃないこととして見るのは、最近たまにしている時がある。だから、Societal は少し楽に取り掛かれると思った。

・初の Societal だった。社会学とはとても範囲が広く、考えるには幅広い知識が必要であると分かった。
ファッションひとつとっても、時代背景が大きく関係している。そういう時には小さい事柄に注目すればよいと学んだ。スカートの丈・ジャケット・髪型・かばんなど、それぞれで比較していくと見えてくるものもあった。

【講評】

本授業の目標は、結論を導くまでの手法（データ分析）を確立させることである。
Societal 的視座を体験させるために、ファッションをテーマに日常の風景を切り取り、当たり前を疑うという導入を行った。だが生徒達はテーマへの関心度が低く、流行そのものに疎い傾向があった。そこで動画を用いて２０世紀のファッション変遷を紹介し、背景を考えることから始めた。視座の取り方や、当時の社会状況や人々の心理が、Societal には必要であると気付いたようだ。結論を導くまでの手法を確立させたい。またデータ処理に関しては、Excel の利用方法を「情報」の授業時で学んでいるため比較的スムーズに行えると予想している。

4)Technological（科学的分野）

【意義・ねらい】

・環境問題について関心をもってもらう
・データが示している内容を正しく読み取る
・論理的思考力を養う
・グループ活動を通して，協調性と問題解決能力を養う
・調査，発表などに必要な技能を身に付けさせる

【授業の流れ】

1 回目	琵琶湖に見られる環境問題についての講義
2 回目	琵琶湖の保全と再生についての講義(講師:琵琶湖環境部 政策課 田仲輝子先生)
3 回目	取り組むテーマの決定
4 回目	調査結果の分析
FW(希望者)	現地に足を運び，現状を見ることで，課題への取組方を考える。

【生徒の感想】

・話を聞いて気づいたのは、問題点は割とはっきりしているけど、それらの利害の複雑な絡み合いが問題だということです。全てを総合的に解決するためにはそれなりの情報量が必要だとも感じました。また多面的な見方や考え方をしないといけないといけないので、次までには少しでも琵琶湖の環境について知っておきたいと思います。
・琵琶湖は日本、また世界的にも重要なものだと知った。琵琶湖は珍しい構造湖というもので、固有種が 61 種もいて、近畿の水は琵琶湖によってまかなわれているからだ。そんな生物にも人間にも必要な琵琶湖をもっと詳しく知って、琵琶湖の環境をしっかり守っていきたい。
・琵琶湖ついてどれだけ自分が無知なのか思い知りました。ブレインストーミングでは economic よりも付箋の数が断然少なかったので、テストが終わった後やフィールドワークでもっと琵琶湖の知識をつけたいです。湿地という難しい問題に頑張って立ち向かいたいと思いました。
・今回、情報を集めて考察していくという作業を行いました。自分たちのテーマに対して適切なグラフやデータを見つけること自体が難しかったです。直接的なデータなどもちろんなく、遠回りの方法でしかまとめられないのがじれったいなと思いました。ここからは班の中での情報収集が重要だと思うので、自分も協力していきたいです。

【講評】

こちらが予想していた通り、琵琶湖で見られる問題の多くは生徒たちにとって初めて聞いた内容であった。また、琵琶湖は身近なところであると感じている生徒は少なかった。4 回の授業またさらに FW を通じて、多くの生徒は琵琶湖の環境が自分たちの生活に大きく関係していることを徐々に感じてきている。琵琶湖で見られる環境問題は、どれも生徒が興味を持ちやすい内容であり、課題を解決しようとする生徒たちの意欲は高いと思われる。

⑤ Global English for 1st Year Students

【Course Mission Statement 】

By carefully observing, researching, discussing and presenting dominant cultural aspects of Japanese society, we will endeavor to not only create a deeper understanding of Japanese cultural attributes, but also simultaneously increase our sensitivity and best practice skills on relation to global communication and intercultural issues.

【Required Academic skills】

Students will be exposed to and expected to practice the following academic skills.

➢Effective research skills (E.g. identifying valid resource material)
➢Effective reading in relation to sourcing research content (E.g. skimming, scanning, academic article approach)
➢Effective writing skills
➢Effective presentation skills
➢Effective thinking skills
➢Effective questioning skills
➢Effective discussion skills
➢Teamwork

【Class Format】

The class is divided into groups of approximately 4 or 5. Each student's role in the group is decided, and they will be expected to fulfill their roles to the best of their ability.
Role includes: *Chairperson; Scribe; Research guide; Researchers; Final editor; Presenters.*
Students' responsibilities are not just confined to their allotted roles. They are expected to cooperate with their team and cover any necessary tasks.

【Syllabus】

Class 1 —decide on a topic (from below) and start putting together a plan of how it will be researched and presented. Start on a written work (one A4 page) on the meaning and origin of your topic of choice.

1.Ambiguity and the Japanese
2.The Japanese Sense of Beauty
3.Silence in Japanese Communication
4.Male and Female Relationships
5.Japanese Social Obligation
6.Private vs. Public Stance in Japan
7.Adopting Elements of Foreign Culture
8.The Japanese Virtue of Modesty
9.Seniority Rules in Japanese Human Relations
10.Japanese Group Consciousness
11.Dual Meanings in Japanese Human Relations
13.The Japanese Custom of Gift Giving
12.Simplicity and Elegance as Japanese Ideals of Beauty

Class 2 —Start putting together the script of a role-play that explains your understanding of your particular topic.

Class 3 —Present and film your role-play. Q and A sessions with classmates and teachers.

【Students' Comments】

Student S

In the first half of GE, I studied the difference of the cultures between Japan and other countries, and how to express phraseology which is usual in the Japan.　In the second half, I want to tell other people what I want to say in English.

Student D

We learned how to explain Japanese customs in English.　It was difficult for me to put our unconscious behaviors in different language. Through this project, I became able to discuss in English, and to perform in front of other people. However, I still feel anxious to perform in front of large crowds, so I need to train for that.

I studied abroad for four weeks this summer, and I felt it was necessary to be able to describe our own cultures overseas. We have to have rich knowledge about our customs. We need to have interests in various kinds of things, and to expand our horizons.

Student I

Our group has studied "silence" in Japanese. While researching, we noticed that there was a big difference between Japanese and foreigners. That is Japanese people do not want to say their own opinions, but foreigners say their opinions clearly. I think that there are many chances to meet people from many countries after this, so I want to able to insist my view with confidence.

Student Y

It was difficult to capture the culture of my country. However, unless you understand your country's culture, you cannot understand the culture of other countries. I understood a little about it through the lesson. Our group had a difficult time picking a difficult theme, so I will think about the future and act actively next time.

Student S

We chose Collective consciousness. In the class, we could not have good discussion. We only searched individually. I regret I should have more cooperation with everyone and I think I will cooperate. In my group, I did almost thing. Other member said anything and did anything, so I did by myself. I think if all af us did together, we could make more nice presentation. Our teacher found mistakes just before the presentation. I corrected our materials. Therefore, I think that I will prepare exactly next time.

Student N

・In the first term, we learned the differences among different cultures. Each group selected one topic of Japanese original culture, WABI and SABI, relationships between older and younger. The topic our group chose was the custom of giving gifts. First, each of us collected information about it. Then we made the script to express the culture shock we had learned. Finally, we tried the roll play with it and took movies of us. I did work little work for my teammates. I took only the first and third classes. I just joined the meeting we chose our topic and playing the scene. Next term, I am sure I will work with my teammates actively.

【Teachers' Comments】

○Acquired Skills

Students were systematically exposed to various aspects of Japanese culture. As groups, they selected a particular Japanese cultural trait that captured their interest. In observing these cultural traits, students were then required to continually reflect on the origin of these traits, their predominance in the everyday lives of the students, and how representations of these cultural norms affect communication with other cultures and countries around the globe.

This was a first crucial step in 'critical observation' for these students. A step that is relatively difficult to quantify by means of physical pedagogical assessment (i.e. a written essay). This initial process turns the observers' views within, and to many students this can be quite an alien environment. They are attempting to view aspects that are so ingrained and part of them that they for the most part seem if not invisible, indescribable.

The students realized the difficulty of such introspection and observations, and by their comments, and active participation in class discussion, it could be assessed that they have *started the ball rolling* in relation to developing an open an inquisitive mind towards the cultural components that make up humankind.

○The Skills Requiring Further Efforts

As mentioned above, representation of introspective findings can be very difficult for native speakers let alone non-native speakers of a language. Therefore, as the students' cultural and global sensitivities grow an efficient level of written and spoken English will have to be attained. When a basic grounding in English is achieved, students will be able to work on academic skills (i.e. presentations and essays).

２．二年生

２年　①STEP ゼミ

1)Political（政治学的分野）

【意義・ねらい】

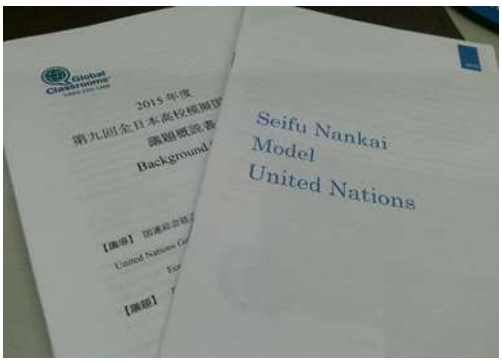
模擬国連では自らの担当する国の課題を探り出し、解決のための決議案を考える。そしてそれが決議となるよう、他の国から理解が得られるよう説明し、折衝する。この取り組みを通して生徒たちは、政治とは「最大多数の最大幸福」を実現するものであると実感し、自国だけの利益にとらわれていてはいけないということに気づくはずである。この自己にとらわれず多様性を認める姿勢こそ、生徒たちが政治を学ぶことを通じて身につけるべきものである。

具体的には①１名ずつ担当国を決定、②担当国の政治・経済、課題等の調査、③議題についての政策立案、発表、④担当国代表として他国大使と交渉、という流れで展開する。

本年の前半は、シナリオ・プランニングのテーマとも関係する「エネルギー安全保障」を議題とし、模擬国連活動を行うことによって、他国への関心、課題発見・解決能力に加え、専門知識の取得（法令等の読解）、プレゼンテーション能力や表現力、交渉力などを養うことをねらいとした。

【授業の流れ】

1 回目	授業ガイダンス、担当国決定、議題発表
2 回目	議題についてのレクチャー①、 Position Paper(基礎情報)作成
3 回目	議題についてのレクチャー②、 Policy Paper（政策立案書）作成
4 回目	政策発表、 決議案を考える
5 回目	会議1日目（公式討議、非着席討議）
6 回目	会議2日目（非着席討議）
7 回目	会議3日目（非着席討議、投票）



【生徒作品・成果物】

サウジアラビアによる決議案

作成国	Saudi Arabia
スポンサー	India, South Africa, Brazil, Canada, France, China
主な内容	・発展途上国発展を優先するため、エネルギーの使用を減少させることは難しい ・再生可能エネルギー(太陽光・風力・バイオマス)への移行が成功次第石油・石炭の使用（火力発電)を減らす ・再生可能エネルギーへの移行の援助となる技術を世界で共有する。 ・そのために国連で再生可能エネルギー移行委員会を開き、各国の先進技術を持って、必要としている国に広める。

投票結果

賛成	7	Saudi Arabia, Canada, Brazil, China, Korea, India, South Africa
反対	2	Iran, United States
棄権	2	Russia, Nigeria

【生徒の感想】

・まず一番に自分の知識不足を実感しました。他国から何かを要求された時知識が足りず、その場で判断出来なかったりしました。あと、自国の利益のみを考えず、どの国もが平等になるようにすることが難しかったです。次の会議では本やニュースを確認するなど知識量を増やして挑みたいです。

・多国間の協調の中で自国や他国の一国ごとの利益を失念してしまいがちになってしまいました。一つの議題を協議するときに考慮しなければならない分野が多岐にわたり、知識不足を痛感すると共に、論点の定め方が難しく感じました。

・昨日いきなり加盟してきて最後に反対にしてきた国がいてびっくりしました笑。思い通りにいかないものだな、と思いました。ただ、皆自国のことや周りの状況を調べてこないと話にならないし、現に今回の提案 3 つもおかしい点がいくつもあった。

・エネルギーについてや、各国の外交関係についての知識が全然足りないなと痛感しました。インターネットで調べるとやっぱり情報量が多いし、正しいのかも信用できないので難しいなと思いました。あと、DR（決議案）の内容をちゃんと各国が理解していなかったり、矛盾が生じていたりしていたところがあったので次からは今回の反省も踏まえてもうちょっと良くなるように頑張ります。

【講評】

《良かった点》

・授業アンケートでは、「課題発見能力が伸長した」「今後、他の授業や行事において役に立つと思う」などの項目で肯定的な回答が得られた。

・第 11 回全日本高校模擬国連大会に 1 組（2 名）が出場することになった。

《反省点》

・事前に自国について調べたものの、自国としての意見が定まっていない国があり、その場の空気に流されたり、議論が過熱しないことがあったこと。

2)Societal（社会学的分野）

【意義・ねらい】

社会や人間そのものに対する考察を深める訓練を行う。具体的には、様々な具体的な事象に対する“分析”を行う訓練と、“分析”につながる資料集めを発行元を意識して行った。

加えて、外部の評価を得るような活動が必要だと考え、前半では「全国高等学校観光選手権大会」に応募した。本校が所在する地域を舞台としたツアープランの作成を行う中で、観光庁や大阪府などによる調査結果を分析することとなった。

様々な資料を付き合わせるという作業をツアーという創造的作業へと繋げていく経験は貴重なものであったかと思う。また、外国人観光客の動向などを調べ、行動やニーズの予測といった側面も考えることになった。

総じてＳＰを実施する際に求められるエビデンスや仮説構築について考えるトレーニングになったのではないかと考えている。

【授業の流れ】

１回目	「社会学」「観光学」についてのガイダンス
２回目	統計資料を用いて、ツアーターゲットの設定
３～６回目	統計資料を用いながら具体的なプランの作成
７回目	ツアープランプレゼンテーション
８回目	発表に対するコメントと反省

【生徒作品・成果物】　　観光選手権企画シート

【生徒の感想】

・観光プランの舞台が泉州で私の住んでいる地域と一緒だったので私にとっては取り組みやすかったです。確かな証拠や統計に基づいてプランを練り、説得力を持たせることが難しかったですが、個人的には納得がいくプランが出来たと思います(若干こじつけたところもありますが)。扱った資料に個人のブログ等を含めてしまった分があるので、今後の授業では公的資料だけを利用したいと思います。メンバーの子と自分が思うことについて言い合いましたが、ここまで自分の思いをぶつけあったのは初めてで、ザ・議論という感じがして楽しかったです。

・全体的に、力不足が目立つこととなりました。自分の根拠が希薄なせいで、意見を持つ事が出来ず、班に多大な迷惑を被らせたと反省しています。
ですが、今振り返ってみると、僕は馬鹿は馬鹿なりに意見を出せばよかったのではないか、とそう思います。間違えていたり、非現実的な意見であるならば、班員が正してくれるであろうし、それこそがグループワークの利点でもあると思いました。

・泉州に関しての魅力を紹介しました。
私たちは情報収集力が足りなかったと思います。またその情報を活用して何か新しい企画を生み出す力も足りませんでした。
他の班は実際にサイクリングで自分たちの案をよりよいものにしようとしていたので次のＳゼミでやってみます。

【講評】

《良かった点》

・“分析”をテーマに、活動を進め、身近な事象に対する“気づき”を大切にするようになった。
・日頃過ごしている地域に関する活動を行うことで、当たり前のこととして見過ごしてしまっていることがあることに気付くことができた。
・外部のコンテストに出すことで緊張感が生まれ、いいものを作ろうという思いが前面に出てきた。
・実地踏査を各班が行うことで、机上の学問と実際の活動が融合した。

《反省点》

・関西国際空港でのアンケート実施希望が生徒からあったが、実現せず、既に公開されている資料だけを使うことになってしまった。
・プラン提示にあたって、一本のストーリーを持ったものとして提示できておらず、観光地の羅列に終わっている班があった。

観光選手権　決勝大会（プレゼンテーション）

3)Economic（経済的分野）

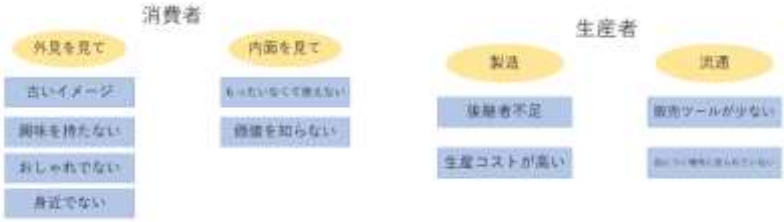
【意義・ねらい】

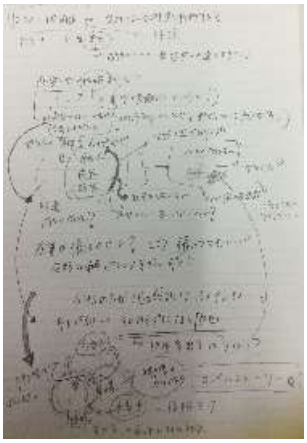
経済と一口にいっても、経済政策や企業行動、金融政策や株・為替などその対象は様々である。SPにつながる経済の知識を身につけさせるとともに、グローバルリーダーとしての資質や実際の進路選択にもつながる活動を考えた。その手段として、日本経済新聞が主催している日経ストックリーグを用いた。日経ストックリーグは大学生を中心としたポートフォリオ作成のコンテストであるが、高校生や中学生も参加し、高校生が優勝しているものである。様々な社会的な問題をテーマにし、企業活動を研究しながらポートフォリオを組むことで、金融政策や国際関係など幅広い知識の習得も含め、経済的な考え方や知識が身につけられる。

【授業の流れ】

1 回目	ガイダンス、関心のあるテーマについてのミニプレゼンテーション
2 回目	経済学の基本概念に関する発表
3 回目	経済学の基本概念に関する講義
4 回目	過去受賞レポートについての検討、各班の活動（発表準備）
5 回目	過去受賞レポート検討結果の発表（関西学院大学経済学部 平山教授も指導）
6 回目	関西学院大学経済学部 平山教授による講義、レポートテーマの検討
7 回目	各班の活動
8 回目	日本政策金融公庫 中谷氏による講義
9 回目	企業対応のロールプレイ
10 回目	レポートテーマ・夏期取組結果についての発表
11 回目	各班の活動

【生徒作品・成果物】





【生徒の感想】

economic の活動では自分の知識を存分に発揮できるような環境ができており、やらないとなと思ってます。
他校のポートフォリオを使ってやったプレゼンは全然うまいこといきませんでした。 ツッコミどころも多かったと思いますし、改善点だらけでした。 エコノミック勢として SP に貢献したいと思います。
テーマは決まったものの、スクリーニングが上手くいかない。 残り半年間は入賞に向けて全力で取り組もうと思う。
日経ストックリーグ自体まだ行き詰まってます。もう少し経済のことを勉強して、できるだけ早く SP の活動にも活かせるようにしたいです。
私は今取り組んでいる日経ストックリーグで、班員として頑張って取り組んでいます。私の班長は集合をかけてくれ、話の内容をまとめてくれ、次までに調べてくる内容を伝えてくれるとても優秀な人です。話が停滞し悩んだこともたくさんありましたが、班長が頑張ってくれているおかげで、前に進むことができています。今ふりかえってみると、自分はただ単に話し合いに参加しているだけなので、積極的に仕事をしていきたいと思います。
Economic の授業では、経済学について詳しく学んだ。学んだ事は将来にも今後の SP にも役立つようないいものであった。

【講評】

経済学の基本概念についての共通理解を培うことから始め、次に日経ストックリーグについての理解を深めるために過去受賞レポートの検討及び発表を行った。受賞レポートの発表では、①なぜそのレポートを選んだのか、②レポート作成者になりきって内容・魅力をアピール、という 2 点に留意して発表を行い、レポートでどのようなことが求められているのかを知る活動を行った。また、この発表の際には、関西学院大学経済学部教授の平山健二郎先生にコメント・指導をいただいた。夏休み明けの最初の授業では経過報告という形で各班発表を行ったが、各班ともテーマ設定に時間がかかったようである。後半は各班が決めたテーマについて活動を行い、レポート作成に取り組む予定である。

関西学院大学の平山先生には講義とストックリーグのテーマ設定のアドバイスをいただいた。また、日本政策金融公庫の中谷氏には、ビジネス・アイデア及びプランについての講義とビジネス展開についてのアドバイスをいただいた。両氏とも、メールでの質問にも答えていただける体制を整えてもらい、心強い存在となっている。

4)Technological（科学技術的分野）

【意義・ねらい】

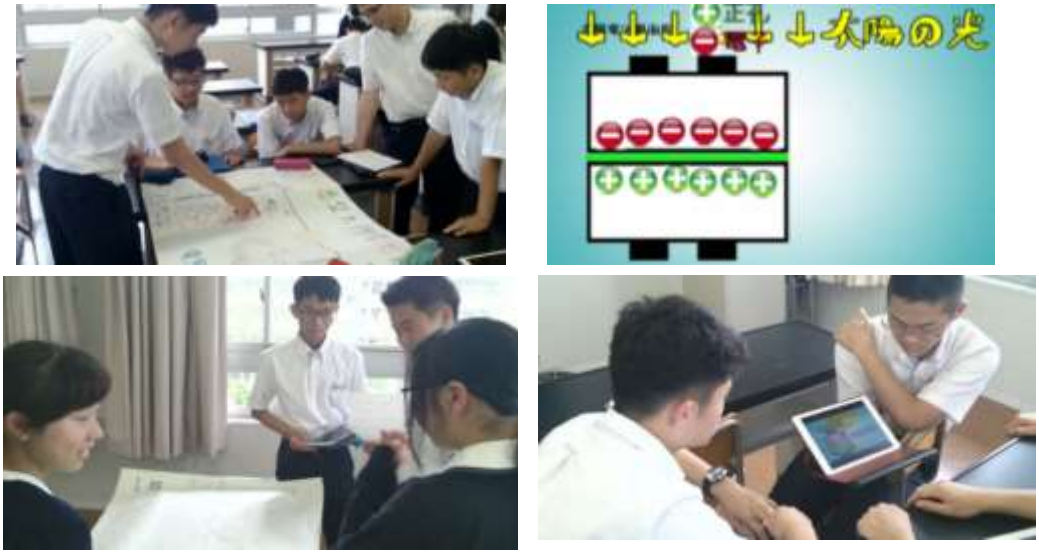
現在の世界が抱えるエネルギー問題について幅広い知見を身につける。そのために様々な電力問題や発電方法について学習する。中でも、化石燃料に代わるクリーンなエネルギーとして政府が導入・普及の促進を目指す再生可能エネルギーについて深く考える。これらを包括的に学習してシナリオ・プランニングに備える。

【授業の流れ】

1 回目	科学的な実験の評価について
2 回目	水蒸気補足実験（レポートの書き方）
3 回目	前回のレポートの書き方の反省
4 回目	現在の発電と太陽電池の概要の講義
5 回目	さまざまな太陽電池について調べる
6 回目	各種の太陽電池について発表
7 回目	色素増感型太陽電池の作成

※夏休み中に京都大学にて太陽電池の作成実習の予定だったが、12 月に延期。

【生徒作品・成果物】



生徒の太陽電池について発表している様子と資料

【生徒の感想】

・このテクノロジカルでは、まずレポートの書き方について学ぶことができました。 水蒸気を補足するだけの単純な実験だったのに、細かいところまで理論的に考えることは難しいと実感しました。また太陽光電池を調べた際にはそれぞれの電池の特色がわかったので、良かったと思います。次回行く京大はあこがれの大学なので、しっかりこの学びを今後に生かしていきたいです。

・始めはレポートの書き方についての授業を受けました。そして次の授業で実際に簡単な実験をして、それについてレポートを書きました。自分では完璧に書いたつもりでしたが多く添削されていたので、レポートを書くことは難しいと思いました。 また、その後は太陽光発電について学びました。自分で調べ発表することでとても知識と表現力を身につけることができました。実際に太陽光発電作ることもしました。自分が作った太陽電池を使って、オルゴールが鳴ったときは嬉しかったです。

【講評】

≪良かった点≫

・レポートを生徒に書かせることで、論理的に説明すること大切さを学ばせることができた。
・教師側から知識を教えるのではなく、生徒が自ら太陽電池について調べ、学べたのはよかった。
・発表は全員が説明する形式をとったので、全員が理解し、知識を定着できた。
・太陽電池を作成することにより、さらに太陽電池について深く学べた。
・作成した太陽電池によりオルゴールが鳴って面白さを実感できた。

≪反省点≫

・専門的な言葉が出てきて非常に苦労していた生徒もいた。
・太陽電池が少し高価で生徒への負担が少し大きかったかもしれない。
・ほかのゼミのように、校外でのコンクールやコンテストに出場できそうなものがあったらよかった。

色素増感太陽電池を作成しているときの様子

２年　②シナリオ・プランニング（SP）

【意義・ねらい】

シナリオ・プランニングの手法を学び、未来予測を行うことで、論理的な思考力の育成を行う。具体的には２回の SP を行った。

①「コンビニ」をテーマとしたシナリオ・プランニング

生徒にとって身近なテーマ設定をすべきと考え、教員側で議論の末「１０年後のコンビニ」というテーマを設定した。流通や働き方など多彩な視点からの分析が可能なテーマだったかと思う。生徒にとっても密に接点のあるものなので、情報の収集などの時間は節約できたと思われる。

②「エネルギー」をテーマとしたシナリオ・プランニング

本校の SGH 構想のテーマが「未来のエネルギー事情」ということもあり、２回目の SP のテーマは「エネルギー」とした。卒業論文に直結する回ということもあり、班分けについてはバランスを見ながら教員側で行った。

【授業の流れ】

１回目（4・5・6 月）	「〇〇年後のコンビニ」についてのグループ SP
２回目（7･8 月）	「エネルギー」についてのグループSP

【講評】

《良かった点》

・生徒の論理的思考力を高めるという意味では、非常に有意義な手法であったと思われる。
・多様な意見が必要となる SP を通して、自然と視野が広がり、他者の意見に対しての受容性が高まったように感じられた。
・１つのテーマにかける時間を増やしたことで、SP の一連の流れについて、生徒の理解が進んだ。

《反省点》

・昨年度よりも１つのテーマにかける時間を増やしたことが、トライアンドエラーを繰り返す経験の減少につながり、唯一の正解はないということの理解を妨げた可能性がある。
・発表の時間についても、各班手探りの状況を反映し、時間が想定より長くかかってしまった。
・国際シンポジウムに向けエネルギーをテーマとしたＳＰの開始時期が自ずと決まってしまい、１回目の反省を十分に行うことが出来なかった。
・上記のことが２回目のエネルギーにテーマを移した際も立ち上がりの悪さとして出ているように感じられる。

【生徒の感想】

《SP１回目》

・全体的に論理を組み立てる必要があったので、論理がくずれないようにするのが非常に難しかった。自分たちがブレーンストーミングで出したアイデアを、１つ１つ理由づけして不確実性-インパクトの軸に当てはめていくだけでも、膨大な知識とデータ、思考力が必要なことがわかった。現状維持、という事象が出てしまったが思考不足だったと思った。非常に長い時間を要した今回のシナリオプランニングだったが、普段何気なく使っているコンビニをどんな現状が取り巻いているのか、どんな未来が待ち受けているのかを詳しく分析(客観的に見ればそうではないのかもしれないが)できたという楽しかった一面もあった。

・テーマ決め・軸取りという案の定な二つが行く手を阻みました
しかし、あともう少しで打開できそうな手応えを感じており、チームメイトとの会話が重要に思える局面です
ここまでを終えて感じたことは、ひらめきが重要であることと、そのひらめきを培うためにはニュースや新聞を見て情報を取り入れる必要があるということです
壇上発表は出来ずとも悔いのない SP にしたいです。

・最初の SP で軸の取り方に苦戦しました。一回取ったのですが、やり直さないといけなくなり本当に苦戦しました。抽象化しすぎると絞れない点があると思いました。

・軸を決めた時、私たちの中ではあまり納得がいっていないものであったがいざ進めてみて発表すると、軸が良かったと褒められることもあり難しいなと思った。

・対象がコンビニという、身近なものであったのに、知識量が足りず、苦戦した。
SP では、まず、情報収集が、第一に必要だということ、そして、軸にする因子、自分たちが出した結果が、いかに、根拠のあるものであるかを確認することが、大切だと、痛感させられた。

・未来予測というと簡単に聞こえるけど、本当に頭がぐちゃぐちゃになるなと思いました。みんなで話しているうちにどんどん論点がずれていって、何を話しているのか、何を話すべきなのか、分からなくなることがいっぱいありました。だから、なんか行き詰まったりすることがめちゃくちゃ多かったんですけど、一番最初に先生が言ってたみたいにそういう時に重くなりすぎないことが大切なのかなと思いました。

・初めての SP はわからないことが多くすごく時間を使ってしまったが、最終的に一応形にはすることができたのでよかった。
二軸を決めて未来を予想するときに、未来を予想するのと予想した未来を補足するデータを探すのが一番難しく大変だった。

・初めて正式なリーダーをやらしてもらいました。やり方が全然わからなくて困った時期もありましたが、集合率が高かったのでじっくり話し合えたことが良かったなと思います。役割分けした仕事をしっかりやってくれる人が多く、助けられました。反省としては、完全に役割分担をしたので、私が発表当日になるまで細かい内容を聞くことができなかったということ。発表の時に、原稿を用意しなかったので、パワポばっかり見て話してしまったことです。

・前の高 2 生の SP の様子を見て、自分で考えて未来を予想するという方法に興味津々であったが、このときはまだ SP に対する理解が低かったようで、ドライビングフォースの少なさや軸選びで少し苦労した。

・軸を決めた時、私たちの中ではあまり納得がいっていないものであったがいざ進めてみて発表すると、軸が良かったと褒められることもあり難しいなと思った。

・シナリプランニングを初めて行い気づいたことは、まず今までやってきたほかのゼミよりも準備作業に大変時間がかかることです。まず最初のテーマ設定と軸設定を試行錯誤していくつかのプランを考えてから設定していくためです。1 回目の発表では最後がやや詰め込み気味で雑になった所があったので、次はそれを修正したいと思います。

③ Global English for 11th Grade Students

【Course Mission Statement 】

Giving presentations is an integral part of the activities that students on the Global course are expected to be able to perform. In this course, students will learn how to introduce various aspects of Japanese culture in an engaging way to an audience abroad, and by doing so contribute to a meaningful cultural exchange. In order to do so, the students have to gain the flexibility to switch perspectives; they will practice to shift between their own Japanese perspective and the perspective of their foreign audience, which is not familiar with Japanese culture. In the process, students will also practice analytical thinking skills that will help them design effective presentations.

【Required Academic skills】

Students will be exposed to and expected to practice the following academic skills.

➢Effective research skills (E.g. identifying valid resource material)
➢Effective reading in relation to sourcing research content (E.g. skimming, scanning, academic article approach)
➢Effective presentation skills
➢Effective thinking skills
➢Effective questioning skills
➢Effective discussion skills
➢Teamwork

【Class Format】

The classes are broken up into smaller groups according to topic to be introduced. Students are expected to organize their groups. Where necessary, they assign roles to ensure smooth, efficient group work. A scaffolded approach is used to assist students in progressing from their actual skill level to the skill level required to give an effective English presentation. Students are allowed to use Japanese in group discussions to ensure the design of a well-founded presentational structure. Guiding questions used in this process will follow basic strategies for English academic essay writing in order to aid the students in acquiring the ability to approach problems in a systematic and logical way. In addition, wherever possible, teacher input and feedback will be in English in order to encourage the students to shift from Japanese language-based problem solving to thinking and talking about the topics in English, to enable them to give a practice presentation in front of the whole class in English.

【Syllabus】

Class 1 — Students discuss what aspects of Japanese culture should be introduced during their excursion to Thailand. They reflect on the unique points of Japanese culture by thinking about what it is that makes Japanese culture distinctively Japanese. In order to create an engaging and informative presentation, ideally, the topic should be as interesting to the presenter as to the audience. For this reason, students are encouraged to use their own interests as a starting point for discussion.

Class 2 — From the list of topics suggested by the students, 7 are chosen and assigned to groups. These groups then discuss the topics with the focus on how to present it in a way that is engaging for the audience. Here, the students practice switching between their own Japanese perspective and that of the Thai audience, which is not familiar with the Japanese culture. At the end of the lesson, each group will have agreed on an outline for their presentation.

Class 3 — Students work on improving their presentation structure by considering guiding questions that focus on the message that they want to convey, as well as on what means to use in order to deliver it effectively. This procedure follows the basic approach to structuring an academic essay and helps the students improve their presentation skills and deepen their understanding of how to deliver information in a persuasive way.

Class 4 — Students practice their finished English presentations in front of the whole class and receive final feedback from teachers and other students.

【Students' Comments】

"I became able to replace difficult words with simple expressions. My task for the future is to become able to make presentations that the listeners find fascinating."

"I gained the skill to give a presentation. My task to work on is to develop my logical thinking."

"I became able to speak English in front of a lot of people. Although I made mistakes, I want to use English without minding mistakes."

"I learned how to make a presentation that interests Thai students. This got me to know the differences between Japan and Thailand. I also learned about Japanese culture and features. While making the presentation I made a lot of mistakes. I felt I have to memorize English vocabulary and expressions."

"We couldn't prepare for the presentation well. We couldn't spend the limited time well and finish all we had to do. But thanks to the teachers we could think of how to attract the audience and what we want to tell them."

"I presented Origami in Thailand. It was difficult to convey the Japanese culture in English, and I had a hard time. However, when it was completed I felt a sense of accomplishment."

"I was able to smoothly present in English. But during the preparation I couldn't express my opinions because I am not very rich in ideas. So I have to think about things with a wide view."

【Teachers' Comments】

○Acquired Skills

Students were systematically encouraged to reflect on and deepen their understanding of Japanese culture in order to identify representative aspects that can serve as a good introduction of Japanese culture aimed at a foreign audience. As expected, this did not pose too great a challenge since the students could draw on their own interests and preexisting knowledge.

The next step for the students was to structure the introduction of the identified aspects in a persuasive and engaging manner while keeping in mind what they wanted the audience to take away from the presentations. To do so, students had to decide on the message they wanted to convey and on examples and reasons to support it in a convincing way.

The final steps were to prepare aides such as videos, audio files and power points, to write up the presentations in English, and finally, to practice in front of the whole class.

○The Skills Requiring Further Efforts

In contrast to the predominantly low-context cultures of English speaking countries, Japanese society is a high-context culture, which means that if crucial contextual information can be inferred, mentioning detailed facts and in-depth logical reasoning are not seen as important as they would be in English speaking cultures. Due to this, students often stop short of producing what would be seen as a convincing argument to an English speaker. Moreover, compared to English, Japanese communication tends to be more about subjective impressions that do not need to be explained and justified in great detail.

For this reason, the crucial skill for students to focus their future practice on is not so much only the correct use of grammar and vocabulary, but the ability to grasp things with an English mind, that is, to grasp things with a clear understanding of the underlying cause and effect relationships as well as the important contextual factors.

３．三年生

卒業論文制作

【意義・ねらい】

高校三年間のグローバルコースの活動の集大成として、これまで行ったシナリオ・プランニング(SP)を卒業作品集としてまとめている。現高校三年生は、グローバルコース一期生として、全てが初の試みである中、非常に頑張って活動をしてきた。しかし、常に次のイベントに追われるような状況であったこともあり、ポスターやパワーポイントは作成しても、研究成果を文章化するという行為がなかなか出来ていなかった。成果を形として残し、彼らが今後の人生の中で振り返る際の依り代にしたいというのが最大の狙いである。また、二期生以降の後輩達が活動をする際の、一つの到達目標として提示することができるとも考えた。

現高校三年生にもたらされる効果として期待したのは、文章化作業を通じて、より考えが整理され、論が緻密になることである。また、本論と注とを分けて書くことで、エビデンスに対する意識が強まることも期待した。

【制作の流れ】

具体的な制作の手順は以下の通りである。

①　国際シンポジウムでの発表を受けての反省点の洗い出し

基本的に、高校二年の秋に開催された国際シンポジウムにおいて、ポスター若しくは舞台上のパワーポイントで発表したＳＰの内容をブラッシュアップしたものを卒業作品とする。しかし、シンポジウムの時点で納得の出来ていない班や、致命的な論の瑕疵が見つかった班などもあり、材料を活かしながら再度一からＳＰを練り直すという班がほとんどであった。

②　「卒業作品集」の構成の説明。

右にあげるような形で卒業作品集の構成を説明した。ＳＰはそもそもグループ作業で行うものであるため個人作品とのバランスに配慮した。また、一期生で先例がないということもあり、サンプル論文を作成して公開した。

③　班内共通部分の執筆

各班のトピックについて、中心となる議論は共通部分とした。それまでに議論を重ねてきたこともあり、話し合いながら書き進めるというよりも、担当を分配して執筆するという班が多かった。

④　個別論述部分の執筆

概要ができあがった後は、個人が班のトピックに絡めて問題提起を行い、自由に論じることとした。ただし、作品集の構成の都合上、班員（10 名前後）のうち、必ず 4 名は、各象限の詳細を自論のテーマに据えることを義務づけた。

⑤　全作品の集約

〆切を設けて、全班の共通部分と、全員の個別論述部分を集め、仮組みを行った。

⑥　英語によるサマリーの執筆

各班の共通部分を、各班の英語係が、また、各自の個別論述部分については、各人が、要約して英語のサマリーを執筆した。

グローバルコース　「卒業論文（仮）」の構成

【はじめに】 A
SP とは（全体共通部分。ここについては教員側で作成する。）

【序論】（班内共通部分）　A4（40 × 40）2 枚程度　B
・トピックの紹介
・そのトピックを選んだ理由
・２軸に挙げた DF の紹介
・４象限の概要説明
・SP マトリクス模式図

【本論】

第一章（班内共通部分）　A4（40 × 40）1 枚程度 C
・トレンドの動向

第二章（班内共通部分）　A4（40 × 40）1 枚程度 D
・X 軸選定の理由（インパクトが大きい理由および不確実性が大きい理由）
・Y 軸選定の理由（インパクトが大きい理由および不確実性が大きい理由）

第三章（個別論述部分）　A4（40 × 40）1-2 枚程度 E
「１～４象限の詳細なシナリオはどうなるか」というのを基本的な問題提起の型とする。
SP を進める過程で生じた疑問を問題提起とすることも可とするので、その場合、担当教員に確認すること。

【結論】（個別論述部分）F
「以上により、○○で△△な場合の××は□□のようなものになると考えられる。」

本論第三章が具体的なシナリオの形で述べられているのに対して、それを一般化した結論をここでまとめる。

【注及び解説１】（班内共通部分）　A4（40 × 40）2 枚以上 G
【注及び解説２】（個別論述部分）　A4（40 × 40）2 枚以上 H
シナリオ自体はどうしても飛躍的な内容で小説的なものになる。それを論理的なものとして提示するために、全ての論理展開に、その根拠となる情報を記載すること。

【添付資料１】（班内共通部分）　必要に応じて I
【添付資料２】（個別論述部分）　必要に応じて J
必要と思われるものを挙げる。網羅的に思考したことを示すためにも、IU マトリクス図は掲載すること。

※個人の卒論としては以上の形式。卒業論文集作成の際には、
A B1C1D1G1I1　E1F1H1J1　E2F2H2J2　…　B2C2D2G2I2　E10F10H10J10　……　E78F78H78J78
という構成になる。

【講評】

- 初めて尽くしの試みの中で、なんとか形になったというだけでも、生徒の頑張りは賞賛に値すると思われる。
- これまで班ごとに行ってきた活動から、個人作業にシフトしたことにより、それぞれの生徒の取り組みの姿勢や、トピックや SP そのものに対する理解の差が如実に顕れた。全員がより積極的に活動に参加できるように工夫をしていく必要がある。
- エビデンスの重要性に気づくことで、今後の学問との関わり方を意識させることが出来たように思う。
- 実際に作成させてみると、SP が論理的な展開のみが求められるものではなく、「論文」というよりも「作品」というのにふさわしいものだということが明らかになった。
- 一期生ということもあり、各論に至るまで、比較的堅い議論が多かった。二期生以降には、より幅の広い、ユニークな作品を期待したい。

生徒名簿　Students Directory

1 年生

A 組

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
1	青山航平	動画		E2
2	石田良浩	親睦会		P3
3	市花裕太			E2
4	井峯賢志			P2
5	岩橋諒	動画		E4
6	大石裕樹		P	
7	岡愛里	司会		E1
8	岡崎理来	動画	P	
9	奥野碧	動画		E3
10	加藤未来			P2
11	亀井建吾			E3
12	菊池宏佑			P1
13	北西正馬	動画		E3
14	久保太輝			E6
15	倉村晃太郎			P7
16	久禮仁視			E6
17	小谷巳隆			E2
18	近藤梨子		P	
19	坂口侑平			P5

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
20	諏訪文子			P1
21	関口みなみ			P5
22	高林晋之介			P1
23	田中開久彌			E1
24	辻村真一			P3
25	寺杣有平			E4
26	永渕諒	親睦会		E6
27	花井龍悟	動画		P6
28	原野真衣			P1
29	古谷友佳	動画		P5
30	増尾友香		STEP	P3
31	松原大			E4
32	丸俊介		P	
33	森澤玲於	動画		P4
34	藪内藤矢			
35	山崎安紀子			P6
36	山本海智			E5
37	山本祐誠			P4

B 組

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
1	入江健介	司会		E1
2	上垣内惇人			E7
3	上田剛史			E1
4	大下望有	親睦会		E6
5	大谷京香			E3
6	奥野眞子		E	
7	加島圭之佑			P4
8	木村栞			P4
9	清田侑花	親睦会		E4
10	久司龍之介			E7
11	久次米智裕	動画		P1
12	小曽根洋紀			P2
13	佐伯涼翔			P5
14	坂本聖治	動画		P3
15	坂本奈穂	総括補佐		E3
16	田中裕紀			P3
17	佃遼季			P7
18	出原望咲		E	

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
19	中翔吾			P4
20	永田充暉			E7
21	洙田美貴男			P6
22	信原理佐		E	
23	波多野創介			P6
24	八反田崚		E	
25	馬場谷祐			P7
26	深見朱鳥			P2
27	藤井恵将			E2
28	堀江源輝	動画	P	
29	森田和			E1
30	森田侑裕			E7
31	森本悠生	動画		E2
32	柳生佳乃			E5
33	山下翔大			E1
34	山田陽介		SP3	
35	吉門秀樹		SP3	
36	吉田零			E5

2 年生

A 組

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
1	上田和輝	動画／ＰＤ補佐		SP4
2	大坪さくら			SP8
3	岡路涼介	総括補佐		SP9
4	小西青海			SP6
5	近藤寛泰			SP9
6	志野亜由子			SP4
7	島本友梨花		SP2	
8	藤井貴大			SP8
9	伏木太作			SP10
10	藤本智也			SP7
11	赤井孝紳			SP8
12	今村駿介	動画		SP5
13	王美優		SP2	
14	應武佳之			SP5
15	大橋正明			SP5
16	小國恵			SP7
17	小林亮太郎			SP4

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
18	阪井宏太朗			SP9
19	坂口凜			SP10
20	竹内優貴		SP1	
21	武田健佑	司会		SP4
22	談儀真也			SP10
23	辻川清香			SP9
24	土井崇司			SP5
25	仲田昂平			SP4
26	中山雄太			SP10
27	西森航史			SP9
28	濱野輝			SP7
29	皆木達也		SP3	SP6
30	源裕輔			SP8
31	三輪祐貴			SP4
32	山川友綱		SP1	
33	山中悠資			SP5

B 組

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
1	烏野結里	PD		SP5
2	小林由理香			SP9
3	島田光希			SP5
4	竹添順平			SP7
5	立野瞳		SP2	
6	村上稜			SP10
7	桃田純平			SP7
8	池井愛美		SP 解説	SP10
9	今道一瑳		SP1	
10	植木俊樹			SP8
11	上野克樹			SP10
12	内山千明	PD		SP6
13	宇野唯	親睦会		SP4
14	沖田倫太朗			SP6
15	荻田七海		SP1	
16	落合優衣		SP1	
17	北野雅智	親睦会	SP1	
18	芥子のぞみ	親睦会		SP4
19	郷田愛			SP4
20	小森一輝			SP7
21	塩谷拓馬	親睦会	SP 解説	SP7

No.	氏名	役割	ﾌﾟﾚｾﾞﾝ	ﾎﾟｽﾀｰ
22	成願龍次郎		SP2	
23	白石優輝	PD		SP5
24	末永あおい		SP3	
25	杉江敏尭			SP6
26	杉原悠生			SP6
27	鈴木涼子		SP2	
28	橘凜人			SP10
29	谷優里			SP6
30	塚本麻衣	PD		SP8
31	辻川千夏			SP7
32	富田媛音			SP8
33	新田彩乃	司会		SP8
34	平野諒			SP9
35	藤居航涼		SP2	
36	堀孝輔	動画	SP2	
37	松川裕成		SP1	
38	南黎音			SP6
39	宮田佳奈		SP3	
40	村上悠			SP9
41	山本竜也		SP1	

PD：パネルディスカッション

編集後記

清風南海高等学校
SGH プロジェクトチーム

当初計画では三年目に初めて行うこととなっていた「国際シンポジウム」であるが、昨年度に１年前倒しで取り組んでみることとなった。試行錯誤の山を積み上げながら無我夢中で取り組んだ結果、何とか一通りの形を作ることができた。

さて、今年度は昨年度の経験や成果を活用し、よりよいものを模索しつつ活動を行って来た。教員の構成・生徒の気質も異なるゆえ当然のことであるが、「二期生色」の国際シンポジウムが出来上がったと思う。一方では、中学生が同日に「プレゼン・グランプリ」を行うなど、グローバルコースをとりまく校内の状況も変化しており、新しい教育の流れに乗った行事としての発展が期待されている。

本冊子は、昨年同様「シンポジウムに参加の外国の方にも読めるものを」との発想から、英訳を可能な限り多く取り入れる方針で編集し、外国の方の来日後の様子も可能な限り載せてみた。

取り組んだという行為の経験そのものが生徒・教員の成長に表れることは間違いない。結果はどうあれ、この冊子が「やってみたたことの記録」となり、継続的な活動の礎となれば幸いである。

今後の予定

◎平成 30 年 2 月 22 日(木)　「平成 29 年度中間発表会」　於、本校

１．スーパーグローバルハイスクール平成 29 年度後半の諸活動の報告

① 「未来を考える国際シンポジウム」を終えて

② 3 年生の「SP 論文集」について

③ 2 年生の SP を中心とする活動について

④ 1 年生の STEP や GE 等の活動について

２．　SGH3 年間の活動のまとめ

３．来年度以降の SGH 活動について

清風南海学園 中学校・高等学校

Tel　072-261-7761
Fax　072-265-1762
http://www.seifunankai.ac.jp/